広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第51号　2002　337－341

幼児の共感のタイプと向社会性との関連

― 同情と個人的苦痛の観点から ―

樟本　千里・伊藤　順子[1]

(2002年9月30日受理)

Relationship Between Empathic Distress and Prosocial Behavior in Preschool Children

Chisato Kusumoto and Junko Ito

The present study examined the relation between empathic distress and prosociality in preschool children. Thirty-four 5-year-old children evaluated their sympathy and personal distress on the empathic distress. They evaluated one's prosociality and their classmate's prosociality in their classroom. For the data analysis, the children were divided according to their scores on sympathy and personal distress into 3 types of empathic distress :type of high-high, type of sympathetic, and type of low-low. The children who were high on both measures, that is, who felt more sympathy and more personal distress, evaluated themselves prosociality than did other children. The classmates judged the children who were high on the other measure, that is, who felt more sympathy and less personal distress, as less prosociality than did type of high-high. These results suggests that it is a important concept in prosociality in preschool children.

Key words: preschool children, empathic distress, sympathy, personal distress, prosociality
キーワード：幼児・共感・同情・個人的苦痛・向社会性

問題と目的

向社会的行動 (prosocial behavior)は，行動が生起するまでにいくつかの段階をふみ，要因相互が絡み合う複雑な過程を経ると考えられている。Eisenberg (1986) の向社会的行動意志決定モデルに拠れば，向社会的行動は「他者の欲求への注意」段階，「動機づけ」段階，「意図と行動のつながり」段階の3段階に大別されている。第1の「他者の欲求への注意」は，相手が困っていたり，苦しんでいること，他者がおかれている状態を理解することにかかわる要因が示されている。第2段階の「動機づけ」の段階には，他者の欲求に気づいた個人が，困窮している他者を援助することを決定するか否かまでを含んだ要因が示されている。最後の第3段階は，意図と行動が常に一致するとは限らないことを示す要因が含まれている。本研究では，第2段階の「動機づけ」に焦点をあて，向社会的行動との関連について検討する。動機づけの段階は，2つのプロセスが示されており，1つは共感に代表される，同情，個人的苦痛といった主に情動的要因を経て向社会的行動につながる過程である。もう1つは原因帰属や信念を含む個人の認知的な情報処理を経る過程である。本研究は先述の情動的要因からの検討にあたる。

共感は向社会的行動の動機づけ要因として多くの研究者が重視してきた(Underwood & Moore, 1982; Eisenberg, 1986; Eisenberg & Mussen, 1989; 浜崎, 1991; 首藤, 1994)。これまで取り上げられてきた共感の概念はかなり幅広いものであり，どの類の共感に焦点をあてているのかを明確にしておくことが必要である。

Eisenberg & Miller(1987)は，「共感」と呼ばれて

[1]宇部短期大学保育学科講師

きたものには以下の3つのタイプがあると述べている。第1に，他人の情動の状態が自分に反映されて，同じ情動を感じる場合の「共感あるいは情動的感染」(emotional contagion)。第2に，相手と同じ情動を経験するわけではないが，相手の情動の状態に関心が向き，それにふさわしい情動で反応する，すなわち「かわいそうに」とか「たいへんだ」という情動反応である「同情」(sympathy)。第3に，他人の情動の状態について否定的で自分中心的な関心がもたれる場合で，相手の感じている苦痛に対してわずらわしさや面倒くささを感じる「個人的苦痛」(personal distress)である。この分類を使えば，「同情」はしばしば共感の一部として扱われてきており，「個人的苦痛」もまた共感とみまちがわれることも多い。個人的苦痛は理論的にいえば共感ではないが，共感と全く関係のないものとして扱うことは困難である(菊地，1998)。

一般的に，共感と向社会的行動の関係は，大人の場合については一貫した結果が出ている。上述のように，共感のタイプは複数あるわけだが，Toi & Batson (1982)は，共感と個人的苦痛との二つを取り上げた実験を行っている。その結果，共感では，回避しやすい・回避しにくいという状況によって行動が変化することはあまりないが，個人的苦痛では，状況によって行動が変わることが示唆されている。

樟本 (1999) は，幼児を対象にして，他者が困窮していることが明らかな場面を見せられた際の，同情 (sympathy) と個人的苦痛 (personal distress) をとりあげ寄付行動との関係を検討している。その結果，寄付行動をする幼児としない幼児との間には，相手に対する同情の気持ちの大きさには違いが見られなかった。一方，個人的苦痛の大きさには違いが見られ，寄付行動をする幼児はしない幼児に比べて個人的苦痛が大きいことが示された。すなわち，他者が困窮している場面を見た際に，このような場面は見たくない，このような場面に遭遇するとすごく嫌な気持ちがすると感じる幼児は，相手は嫌な気持ちだろうけれど，自分は嫌な気持ちにならないと答える幼児に比べて，向社会的にふるまうことが明らかになったのである。

しかしながら，樟本(1999)では同情と個人的苦痛とを別個にして検討している。普段の生活の中で考えたときに，他者困窮の場面に遭遇したときに，個人内，個人間を問わず程度の差は考えられるものの，どちらか片方の感情しか喚起しないというのは考えにくい。そこで本研究では，個人内に同情と個人的苦痛の両方が喚起すると考え，この2つの共感を同時に取り上げて向社会性との関連について検討するものとする。また，樟本(1999)では，幼児の実際の寄付行動との関連について検討したが，本研究では自尊心や有能感としての向社会性を向社会的行動に対する自己の評価を用い，共感という外から見えない内的要因の違いが，友達からの評価に違いをもたらすのかについて検討するために向社会的行動に対するクラスメートの評価を用いた。向社会性に対する自尊心や有能感は，後の向社会的行動にフィードバックすると考えられている(Eisenberg, 1986)ことや，個人の外部からは直接窺い知ることができない情動的な要因が，普段生活を共にしているクラスの友人から向社会的であると評価されることにつながるのかについて検討することは有意義であると思われる。

方　法

被験者

H市内にある幼稚園の5歳児クラスの男児16名，女児18名合計34名を対象とした。

調査内容および手続き

1．共感性評定　場面を他者の困窮状況を目にした場合に特定し，幼稚園での日常生活の中で見られるような他者困窮場面を5場面設定した。Table 1 に5つの場面を示す。各場面は図版と例話によって示し，ランダムな状況で提示した。図版の中には第三者としての被験者の後ろ頭が描かれており，他者の困窮状況の生起には被験者が全く関係していない状況で，同情的感情と個人的苦痛感情がどのくらい喚起するかをたずねた。手続きは以下のとおりである。

「これから○○ちゃんのことを聞くね。どんな感じがするが教えてね」と前置きした後，次のように教示した。

同情の場合：「○○ちゃんは，この子(図版の中の困窮者)を見ていると，かわいそうだという気持ちがしますか。どれくらいかわいそうに思うかな。○○ちゃんのかわいそうだと思う気持ちの大きさを教えてください」。

個人的苦痛の場合：「○○ちゃんは，この子(図版の中の困窮者)を見ていると，もう見ていたくないとおもいますか。○○ちゃんはこの子を見ていることで嫌な気持ちがしますか。どれくらい嫌に思うかな。○○ちゃんの嫌な気持ちの大きさを教えてください」と

Table 1.　同情・個人的苦痛の評定項目

	項目内容
1	「入れて」と言ったのに，遊びの仲間に入れてもらえない
2	大事なおもちゃが壊れてしまい泣いている
3	「やめて」と言っているのに，パンチやキックをされている
4	一生懸命つくった砂山を踏まれて壊された
5	友達が使っているおもちゃを「貸して」と言えずにみている

教示した。

なお，回答の形式は質問項目を提示し，「思う」－「思わない」のどちらかを選択させた後，「思う」と答えた幼児に，その程度「いっぱい－少し」を図版で尋ねる2段階を経る形式であった(Range: 0-15)。

2．向社会的行動自己評価 Table 2 に向社会性の評価項目を示す。なお，この項目は自己評価，仲間評価に使用した。自己評価では，向社会的行動評価の各項目に対して，自分がどの程度行動を遂行できるかについて5件法で尋ねた。手続きは以下の通りである。

「これから，○○ちゃんのことを聞くね。いつもどうしているか考えて答えてね」と教示し，質問項目の図版を提示した。各質問項目に関して，回答選択用の図版を提示し，「こんなとき○○ちゃんだったら，××するかな，それともしないかな」と尋ねた。さらに「する」と答えた幼児には，その頻度について「○○ちゃんはいつもそうするかな，だいだいそうするかな，時々そうするかな，たまにそうするのかなと質問し，回答選択図上で回答するように教示した(Range: 0-24)。

3．向社会的行動仲間評価 仲間評価では，クラスの友達の写真を用意し，自己評価と同様の項目である向社会的行動評価の各項目の行動を多く行っている友達を順位付けて3名選択させた。手続きは，「クラスのお友達のことを聞くよ。よく考えて教えてね」と教示した後，図版で質問項目を提示し，「こういうお友達を3人教えてください」と言い，「クラスの中で第1位の子はだれ？」というように順番に3人の写真を選択させる。被験者が自分で誰を選んでいるかを確認しやすくするために1位から順に，1位，2位，3位と指定された場所に，被験者自身に選んだ友達の写真を並べさせた。クラスの中で1番であると選択された子に3点，2番であると選択された子に2点，3番目であるとされた子には1点と順位づけて得点を与え，合計得点を向社会的行動に関する仲間評価得点とした。

なお，原則的に自己評価と仲間評価の調査は1週間の間隔をおいて実施した。

Table 2. 向社会性評価項目

	項目内容
1	友だちがけんかをしているのを見たとき，けんかをとめる
2	遊びの中に入っていない友だちを見ると，遊びに誘う
3	遊具を友だちと仲良く使う
4	友だちが困っているときに手伝う
5	友だちがいじめられているのを止めようとする
6	困ったり，悲しそうな友だちを見ると，なぐさめる

結　果

1．共感と向社会性の相関

共感（同情・個人的苦痛）と向社会性との関係を検討するために相関係数を算出した（Table 3)。その結果，同情と個人的苦痛との間には有意な相関がみられた。さらに，同情と個人的苦痛と，向社会性自己評価との間にも有意な相関がみられたが，向社会性仲間評価との間には有意な相関はみられなかった。向社会性仲間評価は共感性との間には有意な相関がみられなかったものの，向社会自己評価との間には有意な相関が見られた。これらの結果から，同情得点が高ければ個人的苦痛得点も高く，さらに自分を向社会的であると判断していることが示された。一方，共感的であることと，仲間から向社会的であると判断されることは関連していないが，自分が向社会的であると評価している幼児は，仲間から向社会的であると指名されるこが多いことが示された。

Table 3. 同情・個人的苦痛と向社会性の相関係数

	同情	個人的苦痛	自己得点	仲間得点
同情				
個人的苦痛	.77 **			
自己得点	.66 **	.60 **		
仲間得点	.21	.32	.38 *	

*p<.05 **p<.01

2．共感タイプの分類

先の相関分析では要因の全体的な関連について検討したが，次に個人差の検討を行うために，同情及び個人的苦痛の2種類の共感的側面から共感性に関する被験者の分類を行った。まず，同情得点及び個人的苦痛得点を標準化し，これをデータとして，群平均法によるクラスター分析を行なった。その結果，同情得点・個人的苦痛得点に関して3つの有意なクラスターが明らかにされた。各クラスターの標準得点の平均値をFigure 1 に示す。

同情得点に関して，クラスターを要因とする分散分析を行った結果，クラスターの主効果が有意になった（$F(2, 31)=67.1$, $p<.01$)。LSD法による多重比較の結果，クラスター1はクラスター2（$p<.01$)，クラスター3（$p<.01$）よりも同情得点が低く，クラスター2はクラスター3（$p<.01$）よりも同情得点が低くなった。さらに，個人的苦痛得点に関しても同様の分析をおこなった結果，クラスターの主効果が有意になった（$F(2, 31)=83.7$, $p<.01$)。LSD法による多重比較の結果，クラスター1はクラスター2（$p<.01$)，クラスター3（$p<.01$）よりも個人的苦痛得点が低く，クラスター2はクラスター3（$p<.01$）よりも個人的苦痛得点が低くなった。これらの結果により，クラスター1を「両低タイプ」，クラスター2を「同情タイプ」(n=10)，クラスター3を「両高タイプ」(n=17)と命名した。共感タイプの構成人数は，両低タイプ7名，同情タイプ10名，両高タイプ17名であった。

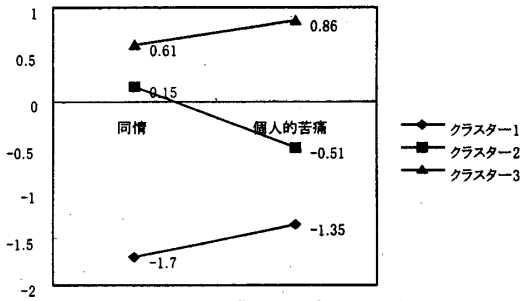

Figure 1.　共感タイプの標準得点

3．共感のタイプと向社会性自己評価

Figure 2 は共感のタイプ別の向社会性自己評価平均得点を示したものである。共感タイプによる向社会性自己評価の差異を検討するために，向社会性自己評価得点についてクラスターを要因として分散分析をおこなった結果，共感タイプの主効果がみられた（ $F(2, 31)=9.9$, $p<.01$）。多重比較の結果，両高タイプの幼児は，同情タイプの幼児($p<.01$)と両低タイプの幼児($p<.01$)よりも有意に向社会性自己評価が高いことが示された。

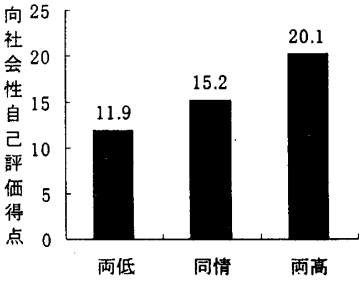

Figure 2.　共感タイプの向社会性自己得点

4．共感のタイプと向社会性仲間評価

Figure 3 は共感のタイプ別の向社会性仲間評価平均得点を示したものである。共感タイプによる向社会性仲間評価の差異を検討するために，向社会性仲間評価得点についてクラスターを要因として分散分析をおこなった結果，共感タイプの主効果に有意傾向がみられた（$F(2, 31)=3.0$, $.05<p<.10$）。多重比較の結果，両高タイプの幼児は同情タイプの幼児($p<.05$)よりも向社会性仲間評価が高いことが示された。両高タイプの幼児と両低タイプの幼児との間には差異は認められなかった。

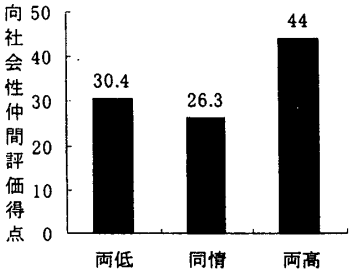

Figure 3.　共感タイプの向社会性仲間得点

考　察

本研究では，向社会的行動の生起過程の中でも動機づけの段階をとりあげ，他者困窮場面に接した際に，相手をかわいそうだと思う同情的な気持ちと，困窮場面を見たくない，見ると嫌な気持ちになるという個人的苦痛の２種類の共感反応と向社会性の関連について検討した。向社会性は，自分が向社会的であるという有能感につながる自己評価と，関係性の中でクラスの友人に向社会的であると判断されているか否かについて検討するための仲間評価の２つを取り上げている。

結果として以下の２点が示唆された。第１に，向社会性に対する有能感を持つためには，同情と個人的苦痛ともに高いことが必要である。第２に，向社会的であるという仲間からの評価は，個人内において個人的苦痛よりも同情が高いことが必要である。以下，この２点について順に考察する。

他者が困窮している場面に遭遇した際に，他者をかわいそうだと思うことと，自分自身が嫌な気持ちになると感じることは，相互に関係しあっていることが相関分析の結果から示されている。共感のタイプは，感情反応が全体的に高い幼児の両高タイプ，感情反応の程度は平均的な水準であり，個人的苦痛よりも同情する気持ちの方が敏感な同情タイプの幼児，全体的に感情反応が低い両低タイプの幼児の３タイプに分類できた。この３タイプと向社会性自己評価との関連について検討してみると，同情タイプと両低タイプの幼児に比べて両高タイプの幼児は，向社会的場面で自分は向社会的にふるまうことが多いと判断している。この結果は，共感は向社会的行動を動機づけるという従来の研究の結果を支持するものである。しかしながら，同情タイプの幼児が両高タイプの幼児に比べて自分を向社会的であると判断しないのは，感情反応の水準が不足していることによるものなのか，同情と個人的苦痛の喚起がアンバランスで，個人的苦痛をあまり感じていないことに拠るものなのかについては明らかではない。寄付行動の有無と同情，個人的苦痛それぞれとの関連について検討した樟本(1999)は，幼児の寄付行動の有無が同情する気持ちには違いが見られなかった一方で，寄付をする幼児は寄付をしない幼児に比べて個人的苦痛が高いことが示されている。寄付バランスの問題なのか程度の問題なのかについては今後検討していかなければならないと思われる。

次に，共感のタイプと向社会性仲間評価との関連は同情タイプの幼児が両高タイプの幼児に比べて，周囲から向社会的ではないと評価されていた。両低タイプの幼児と両高タイプの幼児の評価には差異が認められ

なかったことから，仲間から思いやりのある子だと評価されるのには，感情反応のレベルは大きな要因とはならないのではないかと推察される。同情タイプの幼児は2側面のバランスからみると，困窮している他者に遭遇した場合に，「かわいそうだと思う」だけど「自分の気持ちとは関係ない」と感じる子どもたちである。つまり，相対的にある程度の感情反応があるということよりも，個人内において個人的苦痛に対して敏感ではないことが，向社会的行動の生起を妨げているのではないかと考えられる。

以上の結果から導き出されることは，幼児期の向社会的行動は自己中心的な動機に左右されるのではないかと考えられる。Batson は，共感（同情を含む）が利他的で他者指向的な動機を生み出すのに対して，個人的苦痛では，自分自身の苦痛をやわらげようとする自己中心的な動機を引き起こすと述べている（Eisenberg & Mussen 1989）。本研究の同情タイプの幼児は，平均レベルの感情反応はあるものの，同情に比べると個人的苦痛が低い幼児である。したがって，自己中心的な動機があまり生じない幼児であると考えられる。その幼児が，両低タイプとは差がないものの，両高タイプの幼児に比べると仲間から向社会的であると評価を受けないということは，実際の日常場面で向社会的に振る舞っていないと思われる。同情に比べてあまり個人的苦痛を感じないという同情タイプのような幼児が，個人的苦痛を感じるような場面において向社会的行動をとるのかという，場面状況的な検討は今後の課題であると思われる。

【引用文献】

Eisenberg, N. 1986 *Altruistic emotion, cognition, and behavior.* Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.

Eisenberg, N., & Miller, P. 1987 The relation of empathy to prosocial and related behaviors. *Psychologycal Bulletin*, **101**, 91-119.

Eisenberg, N., & Mussen, P. 1991 思いやり行動の心理学 菊地章夫・二宮克美，（訳）金子書房.
(Eisenberg, N., & Mussen, P.(1989). *The root of prosocial behabior in children.* New York: Cambridge University Press.)

浜崎隆司 1991 幼児・児童における向社会的行動の動機づけ要因としての共感性 広島大学幼年教育研究年報，**13**，25-34.

菊地章夫 1998 また／思いやりを科学する 向社会的行動の心理とスキル 川島書店

Krebs, D, L., & Sturrup, B. 1982 Role-taking ability and altruism behabior in elementary school children. *Journal of Moral Education*, **11**, 94-100.

樟本千里 1999 視点取得能力と感情喚起が幼児の向社会的行動に及ぼす効果 広島大学教育学部紀要 第一部（心理学），**48**，193-201.

首藤敏元 1994 愛他行動に随伴する幼児の positive 感情に関する研究 埼玉大学紀要 教育学部（教育学部II），**43**，69-83.

Toi, M., & Batson, C.D. 1982 More evidence that empathy is a source of altruistic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 281-292.

Underwood, B., & Moore, B. 1982 Perspective-taking and altruism. *Psychological Bulletin*, **91**, 143-173.

（主任指導教官 山崎 晃）